未来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

⑧防災科学研究拠点の発足

東日本大震災直前の2011年1月、新聞インタビューを受ける筆者

災害前の史料保全

プロフィール欄をご覧いただくと、私の経歴には東北大学災害科学国際研究所の所長というのがあります。私の専門は歴史学。しかも江戸時代という古い時代が対象です。それがなぜ、理系のイメージの強い災害科学を専門とする研究所の所長になっているのか。不思議ですね。

じつは宮城県を襲った地震や津波の災害が、そのことと関わっています。数回にわけて、いきさつを紹介しておきたいと思います。

2003年の宮城県北部地震のあとに宮城歴史資料保全ネットワーク（宮城資料ネット）を立ち上げ、災害から歴史資料を守るための活動を始めたことは4回目の連載で紹介しました。スローガンは、「災害が来る前の史料保全」です。もし災害や火災等で古文書が失われたとしても、写真データがあれば家や地域の歴史だけではなく、日本歴史の研究が可能になるからです。全国で初めての組織的な取り組みでした。

県内各地で古文書の調査を行い、デジタルカメラで写真撮影する作業を続けていましたが、あるときハタと気になり始めました。

文理連携の防災科学研究

当時は地震学者から、およそ30年周期で宮城県沖地震が発生すると警告されていました。前の宮城県沖地震は1978年でしたから、いつ来てもおかしくはない時期でした。災害から古文書を守ることは大事なことですが、人びとの命や生活を守ることも考えなければならないのではないか。どうすればそういう仕事ができるのだろうか、と考えるようになったのです。

もちろん自分だけで、そんなことはできません。思いついたのは、他分野の研究者と一緒に社会の役にたつ防災研究ができないかということでした。幸い東北大学には、災害にかかわることを調査研究している教員がたくさんいました。こうした先生方にお声がけをして、防災研究のプロジェクトをつくろうと考えたのです。

最初に声をかけたのは、工学部に所属する津波工学の今村文彦教授でした。津波研究では世界トップレベルの実績をもっています。即座に賛同してくれた今村先生は、理系の研究者に声をかけてくれました。私は文系の研究者に輪を広げていきました。

この防災研究は東北大学として大きな社会貢献事業になりますよという私の提案を、当時の井上明久総長が採用し、東北大学防災科学研究拠点が発足しました。2007年3月のことです。文系では心理学、社会学、経済学、法学など、理系では地震学、土木工学、建築学、情報学、救急医学、保健学、脳科学などから、20人ほどの教授が参加してくれました。

大学のなかに防災をテーマにした横断的研究組織ができたのは、初めてのことでした。文理連携の共同研究で社会に必要な防災研究の枠を広げ、災害が発生したときに大学として素早く対応すること、行政や社会の諸団体と連携して防災対策を強化していくことなどを目標にしました。防災セミナーを開いて、防災の課題や社会的な取り組みの必要性を訴えていったのです。

研究拠点の代表を私、副代表を今村教授が務めました。このコンビがのちに、災害科学国際研究所をつくりだすことになったのです。

2008年1月開催の防災セミナー

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。